おひさま通信

# 改善後の成果と課題

## ー 太陽の里 ー

2003年5月から「太陽の里改善」事業として、日中活動の充実、障害に視点をあてた取り組みの充実、住居環境の緊急改善、人手の確保、短期入所の改善、暮らしの場の改善の6つの課題に取り組みました。2011年9月、暮らしの場の改善である改築と大規模修繕事業が竣工し、8年と4カ月にわたる太陽の里改善事業はようやく完了しました。新しい暮らし作りをはじめ4年がたち、仲間の姿、職員の動きなど見えてきた課題や成果を『暮らし』『仕事』『職員体制』などの視点から成果と到達点を整理し、次の暮らしの場づくりへと繋げられたらと思います。

### 日中の仕事

「日中は仕事をする」仲間から出た言葉です。ショウゴさんは「ポポは？ポポある？」、レイコさんからは「ワッフル！あるよ！」「おかいもの！」とよく聞こえてきます。不安そうに「明日の仕事はある？」と聞いてくるショウゴさんに「あるよ」と答えると、安心した表情に変わり、レイコさんの期待した眼差しの問いかけは、ワッフル（仕事があること）を楽しみにしていることがよくわかります。こんなに仲間たちの声が聞こえるようになったのは暮らしの場が「小集団」になったからだと思います。

小さな集まりで暮らすことは「あたりまえ」の暮らしならではの「いってらっしゃい」「おかえりなさい」「ただいま」の声が聞かれ、「今日の仕事は何をしたの」とその日の仕事の話をしたり、「お疲れさま、あしたも頑張ってね」と声をかけることが「あたりまえ」にもなりました。そして、「個室化」は一人ひとりを意識しコミニュケーションのとれる集団となり、部屋は仲間らしさのある個性豊かな部屋となりました。ヤスシさんの部屋は大好きな相撲のタペストリーが飾られ、ノリコさんやケイコさんの部屋は大好きなキャラクターやアイドルのポスターが貼られています。部屋が暮らしから仕事へ行く前の、気持ちを切り替える場所にもなりました。

### 仲間との暮らし作り

小集団の暮らし作りを行う話を聞いたとき、漠然としたイメージしか浮かびませんでした。当時の女子棟では自分たちでどんな暮らし作りができるのか仲間が急な変化に戸惑うのではないかと考え、白岡駅の近くの一戸建てを借りて6～7名で暮らし作りをはじめてみました。自分たちでご飯を炊き、味噌汁を作り、厨房から運んだおかずをお皿に盛り付け、朝食は自分たちで魚や卵焼きを作りました。今現在、6ユニットで行っていることを先に行っていたのです。どうなることかと思いましたが、仲間たちは自然にお互いに気を使いながら手を貸し、慣れない場所で戸惑い動けなくなっている仲間に声をかけ、食事や入浴を一緒に行う姿を見せてくれるようになりました。お皿を並べる人、ご飯をよそってくれる人など自然と役割も出来てきていました。「仲間が暮らしを作るんだよ」と先輩職員が話していたのはこういうことかと実感できた瞬間でした。それは、6ユニットの暮らし作りへと繋がりました。

仲間は自然とリビングに集まり、テレビを観ながら談笑し、雑誌や新聞を読んでいます。はじめは個室になったことで自分の空間が出来たと部屋にこもりがちになるのではと思っていました。それが、部屋は寝るときに入るだけという姿がありました。どうしてなのだろうと考えた時にキッチンがありテレビの前にはゆったりと座れるソファが置かれ、食事の時間が近くなると味噌汁と炊き上がるごはんの匂いがリビングに漂っていること。自然に「今日のご飯はなんだろう」「いいにおいがするね」など会話が弾みます。キッチンがあるということが家では当たり前です。その当たり前のようにある環境によって仲間たちは一緒に食事の用意をし始め、洗濯をして干すという姿を見せてくれるようになったのではと思います。仲間や職員との何気ない会話も「なんだろう、何を話しているのだろう」と興味をそそられ、楽しそうに自分も自分もと会話に入ってくる姿もあります。そして、

一つのユニットにキッチン、お風呂、お風呂場の前には洗面所、その隣にはトイレと一つの動線が出来たことも大きいと感じています。以前はお風呂に入ろうというと一度棟を出て大浴場に入っていました。それが一般の家庭に比べたら大きいかもしれませんが5、6人が入ればいっぱいになる大きさのお風呂。仲間の意見を取り入れたピンク色のお風呂です。今まで大きいお風呂は嫌だと言いなかなか入れなかったフミコさんが渋々ですが「サユリちゃんと一緒に入る」と毎日入る姿があります。仲の良い仲間と一緒に入るということが大きいですが今までのような大きさ、距離のままであったら入らなかったのではと思います。

キッチンの色、食器棚の種類、部屋のカーテン、リビングのソファ、お皿やコップなど自分たちで使うものはカタログやお店に行き実物を見ながら仲間が選んで購入してきました。『家』に近い環境を一緒に作ることでそこで暮らす自分たちの姿を想像しやすく、作り上げることが出来たのではと思います。

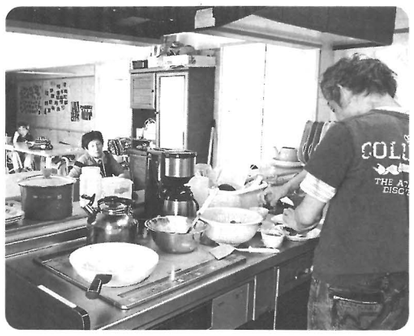
### 職員の抱えるジレンマ

「作り」という部分では、6つの家という形はとてもよいと思います。「配置」という点では課題が見えてきました。週末、各ユニットに1名ずつ職員は配置されていますが女性職員のみ、男性職員のみしか配置できない時があります。混合棟など同姓介護上の業務が発生した際、他のユニットに応援の手配をしなくてはいけなくなり職員が移動する間、ユニットに職員が一瞬でも不在になるということが起きました。また、夕方以降の時間帯に緊急受診等が発生した場合、勤務を終えまだ里にいる職員がいれば何とかなります。しかし、誰もいない場合、仲間の入浴を中止したり、ほかのユニットに応援を頼んだりして人をひねりだしています。仲間の暮らしに影響もあります。日中もそうですが夜勤業務に入る職員は、日々緊張感に包まれた業務をしているのではと思います。

ユニットに暮らす仲間の人数が少なくなり業務が減るのかというとそうではなく、逆に配慮する点が増えたことで業務は増えているのではないでしょうか。ユニットに入る職員は、仲間に関わることだけではなく、洗濯、排泄に関わるものなど、欠かすことの出来ないその他数え切れないほどの多くの間接業務をほとんどの時間帯一人で行っているのです。

一番大きなこととしては、「伝える」ことの困難さが浮き彫りになってきていることです。複数配置の時には、同僚（特に先輩に当たる職員）の動きから学ぶことや自分以外の職員が仲間と関わる姿を見ることで、普段見ることの出来ない様子を知る機会もたくさんありました。現在は、練習期間を過ぎると、一人でのユニット仕事となってしまいます。直接見て感じて学ぶ機会が俄然減っているのが現状です。自分から手繰り寄せることももちろん大切です。しかし手繰り寄せるに必要な体験、機会も少なくなっているのは事実です。仲間のことや業務のことなど文章だけでは伝わりきれない困難さも出始めています。「伝えたことが伝わらない」もどかしさを職員は抱えています。そんな中でも、「自分で考え行動を起こさなければならない」と受け身ではない姿勢で仲間と向き合えるようになったという頼もしい意見をくれた職員もいたことは光明です。だからこそ、今回上がった事柄に対しては、きちんと対処を考えていかなければならないと考えます。

何人もの職員に話を聞いた中で、みんなに共通していたことは、開口一番仲間目線での意見でした。普段の業務の中、今ある環境下で、いかに仲間たちが暮らしやすくなるかを考えることが染みついている職員集団っていいなと思いました。そして、仲間のこと仕事のことを語れる時間が少なくなってきた現状、そのような場をつくれる職場環境を整え直さないといけないと感じています。

加齢等の問題から配慮の必要な仲間が増えてきている中、仲間の暮らしを豊かに、安心安全な暮らしをと考えると、複数の職員配置や環境整備か必要になってきます。今ある課題を精査し、体制や業務の見直しをすることが職員の業務軽減に繋がり、長期的な視点に立てば仲間の豊かな暮らしに繋がるのではと考えます。

太陽の里職員　山田　隆久
星原　直美、高橋　守